

## lâzen の用法について

### — 押韻技法の観点から —

武 市 修

#### 0. はじめに

中高ドイツ語（以下 Mhd. と略記）の lâzen は本来反復動詞であり、人や事物、また再帰代名詞を目的語にとって loslassen, entlassen, aufgeben, unterlassen, zurücklassen 等さまざまな意味で用いられた。それと並んでしかし、Mhd. においてももうすでに新高ドイツ語（以下 Nhd. と略記）の lassen と同様、不定詞を伴い使役の助動詞としても用いられていた。そしてどちらの用法においても、本来の形とともに、縮約形 lân, lât 等がリズムを整え、押韻するのに利用された。本稿ではこの動詞について『ニーベルンゲンの歌』、『イーヴァイン』、『パルツィヴァール』、『トリスタンとイゾルデ』、『イタリアの客人』の5つの作品における用例を比較検討し、Mhd. の押韻文学における用法の特徴を明らかにしたい。

#### 1. 『ニーベルンゲンの歌』における lâzen

『ニーベルンゲンの歌』には lâzen の形は前つづり ge- の付いた2例を含め58度見られる。それらは動詞が18度と助動詞が40度であり、いずれも行中に現れる。これに対しその縮約形 lân は、否定辞の付いた enlân 1例を含めて動詞30と助動詞42の合計72例中68度押韻に用いられている。このように lâzen と lân は押韻に関して明らかに使い分けられている。まず、本来の語形 lâzen から考察を始めよう（以下必要に応じて用例の下に韻律符号を添えて行のリズムを示し、当該形にはアンダーラインを付すことにする）。

- (1) ich hân ûf êre lâzen nu lange mîniu dinc / ... (2028, 2)

x | x x | x x | - | x ^

私はこれまでずっと、名誉を旨として行動してきました

- (2) Minneclîche triuten des kund'er vil begân  
ob in diu edele vrouwe hete lâzen daz getân. (634, 1f.)

x lǣ x lē ~ xl ē | x̃ | x xlǣ x | x̃ xlǣ̃

もしもこの高貴な婦人が彼にそうするのを許していたなら、  
彼はやさしく愛することが大いにできたであろうに。

lâzen の動詞 18 例の内訳は不定詞 15 の他に、過去分詞が 2 と 3 人称複数接続法現在が 1 である。一方、助動詞 40 の内訳は不定詞が 33 の他に過去分詞 1、wir に対する接続法現在 4 および 3 人称複数接続法現在 2 である。例 (1) の lâzen は 4 格の目的語 miniu dinc をとる本動詞の過去分詞で、miniu dinc ûf êre lâzen は mein Verhalten auf Ehre stellen の意味である<sup>1</sup>。例 (2) は助動詞の過去分詞であり、いずれも行の韻律を満たすために縮約形 lân でなく本来の形 lâzen が用いられている。(2) の例では lâzen は本来なら不定詞 tuon をとるべきところであるが、過去分詞 getân が用いられたきわめて稀な例である。de Boor がこの個所の脚注で、この lâzen getân は nhd.なら逆に tun lassen となり、この場合 lassen は過去分詞であると述べている<sup>2</sup>ように、この getân は hete と結んだ完了ではなく、lâzen が過去分詞で、ここは前行の begân と押韻させるための苦肉の策である。lâzen が不定詞の代りの過去分詞とともに用いられる例は Mhd.では非常に稀である。Jacob Grimm によれば、この組み合わせはもっぱら古ノルド語で現われ、過去分詞は不定詞の意味である。このような用法は古高ドイツ語 (Ahd.) には皆無であり、Mhd.でも、他にあるかも知れないが、彼自身は 2 例しか知らないとして、『イーヴァイン』3142 (これについては後に当該の個所で触れることになる) とヴォルフラムの『ヴィレハルム』275, 8 を挙げている<sup>3</sup>。このような統語的には不定詞の役割をする過去分詞について I. Schröbler は簡単に示唆しているが、それを改定した S. Grosse はその個所を削除した<sup>4</sup>。わずかとはいえ

1 Vgl. de Boor: Nibelungenlied, Anmerkung zu 2028, 2.

2 Vgl. Ebenda, Anm. zu 632, 2.

3 Vgl. J. Grimm: Deutsche Grammatik, 4, 126f.

4 Vgl. Paul/Moser/Schröbler, § 315, Anm. 1; Paul/Wiehl/Grosse, § 331, Anm. 1.

このような用例があるのだから、それについての言及を削除したのは文法書としては不適当な改変である。C 写本ではこの不自然な表現を避けて、この行は *ob im des diu frouwe gegunnet wolde hân* (もし王妃が彼にそれを許そうとしていたら) としている。意味上はほとんど同じであるので、文法的にこの方が適当であるかもしれない。

Mhd. では lâzen の過去分詞はこれらの例に見られるように、ふつう前つづりの付かない形であり、gelâzen という語形はこの作品には行のリズムを整えるために動詞の不定詞に *ge-* の付いた例が 2 度現われるのみである。次にその 1 例と接続法の 1 例と合わせて示そう。

- (3) „Ine mac ir niht gelâzen“, sprach des küneges wîp. (823, 1)

x x| á x| á x| á x| á

『私はこの話をやめる訳にはいきません』と王の妃は言った。

- (4) *dâ sterbent wan die veigen: die lâzen ligen tôt.* (150, 2)

そこでは死すべき運命の者だけが死ぬのだ。

そういう者は死なせておこう。

(3) の *gelâzen* は不定詞に前つづり *ge-* が付いたもので、「やめる」「捨てる」の意味の他動詞である。ここでは 4 格の目的語 *niht* をとり、*ir* はのちに例 (8) で示すように、その前節で述べられたブリュンヒルトのせりふの中に出てくる女性名詞 *rede* を受ける人称代名詞であり、*niht* にかかる部分の 2 格である。この行は *ge-* がなければリズムが変わり、滑らかな流れが損なわれる<sup>5</sup>。(4) の *lâzen* について de Boor が脚注で、これは要求を表わし *wollen wir lassen* の意味であると指摘し、また文法書にも説明されているように、ここは主語 *wir* が省略された命令を表わす接続法現在による勸奨法である<sup>6</sup>。

5 もう 1 例も *Jane mac ichs niht gelâzen* (2178, 1a) のように (3) と同じ構文である。

6 Vgl. de Boor: *Das Nibelungenlied*, Anm. zu 150, 2; Paul/Mitzka: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, § 283. このような *wir* の省略はもちろん *lâzen* だけに限ったものではない。I. Schröbler はその例として『ニーベルンゲンの歌』の中から *binden* と *rûmen* の例を挙げている。Vgl. Paul/Wiehl/Grosse, § 399 (=Paul/Schröbler, § 270).

次に縮約形 *lân* を見よう。 *lân* の動詞 30 の内訳は不定詞が 26 と過去分詞が 3、3 人称複数接続法が 1、助動詞は 42 例すべて不定詞である。次の (5) は本動詞 *lâzen* の不定詞の縮約形 *lân* が押韻に用いられた例である。この *lân* も (3) と同じく事物の 4 格目的語をとり、「やめる」「捨てる」の意味で、ここは *die rede* を直接目的語にとっている。同じ意味であるが、(5') は押韻のために助動詞 *lâzen* が不定詞 *sîn* をとっている。 *sîn lâzen* は「あるままにさせる」が原意であるが、それから「やめる」「捨てる」の意味に転用されたものである。なお、例 (5) の *sult* は Nhd. の *sollen* と同じように命令法の代わりをする助動詞 *soln*, *suln* の直説法であり、これからもしばしば見られるように Mhd. でもすでに命令法の代用として多用される。

(6) は本動詞 *lâzen* の縮約形 *lân* が *werden* の接続法過去 *wurde* とともに受動になった唯一の例である。(7) は同じく動詞 *lân* が行中で現われる数少ない例のひとつであり、この形で滑らかなリズムが保たれている。なお、この行の前行では、*soln* (*suln*) の接続法過去 *solde* の *-e* が次の *ich* と母音衝突するため省かれ、この省略形で強弱のリズムが守られている。

- (5) *dô sprach der marcgrâve: „die rede sult ir, vrouwe, lân.“*  
(1261, 4)

その時辺境伯が言った『王妃様、そんな話はおやめください。』

- (5') *iuwer ungemüete daz sult ir lâzen sîn.* (1263, 2)  
そなたの悲しみ、それは捨てなさい。

- (6) *doch enkan ich niht gelouben, daz ez wurde lân.* (294, 3)  
x x | x x | x x | x x | x x | x x | x x | x x |  
しかし私には、それがなされなかったなどとは信じられません。

- (7) *zuiu sold' ich mînen vînden lân sô michel guot?* (1272, 3)  
x | x x | x x | x x | x x | x x | x x | x x |  
どうしてわが敵どもの手にあれほど大きな財宝を  
委ねておかねばならないのか。

*lâzen*, *lân* 以外では、*lâzet* が 21 度すべて 2 人称の *ir* に対する使役の助動詞で、これらはすべて行中である。*lâzet* 21 例の内訳は、命令形が、主

語 *ir* を伴う 2 例 (349, 4; 1777, 3) を含めて 16、*ir* の直説法現在が 3 と接続法が 2 である。縮約形 *lât* は *enlât* 1 例を含めて、2 人称 *ir* に対する 77 度と 3 人称単数が 3 度の、合計 80 度ともすべて使役の助動詞で、1 度だけ行末にきている。また *ir* に対する *lât* は主語を伴う 2 例 (1887, 3; 1939, 2) を含めすべて命令形である。それ以外には *du* に対する動詞 *lâzest* と、その縮約形がウムラウトした *læst* がそれぞれ 1 例ずつ、さらに 3 人称複数直説法現在の *lâzent* とその縮約形 *lânt* が 1 例ずつ (2097, 3; 914, 4) 見られる。次にそれらの用例のいくつかを見よう。

- (8) des wil ich dich, Prünhilt, vil friuntliche biten,  
daz du die rede lâzest durch mich mit gütlichen siten.  
x | x̣ x | x̣ x | x̣ | x̣ |  
プリュンヒルトさま、くれぐれもお願いいたします、  
どうか私のためにそんなことを言うのは、おやめくださいませ。
- (9) Des bringe ich dich wol innen unt læstuz âne nît. (651, 1)  
あなたさえ御異存がなければ、私の気持を行動で示しましょう。
- (10) habt ir iht guoter vriwende, daz lâzet balde sehen,  
x | x̣ x | x̣ x | x̣ | x̣ |  
die iu vriden helfen die bürge und iuwer lant. (145, 2f.)  
あなたのために城と国を守ってくれそうな立派なお味方が何がしかでもおられるなら、それをばすぐにお見せなさいませ。
- (11) Dô sprach von Tronege Hagene: „frouwe, lât uns sehen  
iuwer spil diu starken. (424, 1-2a) | x̣ x | x̣ x | x̣ | x̣ |  
その時トロネゲのハゲネが言った。『女王様、あなたの強い技を我々にお見せください。』
- (12) wie rehte unvriuntliche ir daz schînen lât  
daz ich iu wol getrûwe für alle ander man, (2189, 2f.)  
私がこれまで他の誰よりもそなたに信頼を置いてきたのに、  
そなたは何と理不尽な報いをすることか、
- (13) Der ist sô grimmes muotes, er lât iuch niht genesen,  
ir enwelt mit guoten sinnen bi dem helde wesen. (1547, 1f.)  
あれはとても猛々しい気性の男ですから、あの勇士を相手に

うまくやらないと、彼はあなたを生かしてはおかないでしょう。

- (14) .../die iuch niht fürwise zen herbergen rîten lânt. (914, 4)  
彼らはあなたを宿舎への道に迷わせたりしないでしょう。

(8) (9) は du に対する人称形の 2 例である。(8) の daz 文は 1 行目最初の指示代名詞 des で先取りされており、動詞 biten の目的語に当たる文であるから、lâzest は接続法現在であろう。(3) の例の ir はこの例の 2 行目前行の die rede を受ける人称代名詞である。(9) はこの作品に見られる lâzen のウムラウトした形の唯一の例で、これは B 写本によるものである。(10) (11) は ir に対する命令形の例で、上に示したように、行のリズムを整えるために、ふつうの形と縮約形が使い分けられている。また (10) では以下にも見られるように、命令文でもリズムの関係で動詞が文頭ではなく 2 つ目に置かれている。さらに、2 行目は 1 行目前行の条件文中の vriwende を先行詞とする関係文であり、前の行の gescehen と sehen で押韻するために先行詞と関係文の間に主文が挿入されている。(12) は lât で押韻した唯一の例で、ここは前の行の bestât と韻を踏んでいる。前述したように、lât の主語はほとんどが 2 人称の ir であるが、(13) は 3 人称単数が主語の 3 例中のひとつである。なお、2 行目の enwelt は否定辞 en- と接続法で、この文は wenn nicht の意味の除外文である。(14) は 3 人称複数直説法の唯一の例で、前の行の gânt と押韻している。

この作品には ir に対する命令形は非常に多く用いられているのに比べ、du に対する命令形は本来の形が 2 例と縮約形が 3 例見られるだけである。次にそれらについて見よう。

- (15) Neinâ, herre Dietrich, vil edel ritter guot,  
lâzâ hiute schînen den tugentlîchen muot, (1985, 1f.)  
いいえ、気高い立派な騎士ディエトリーヒ殿、  
今日はあなたの徳高い心をお見せくださいませ、  
(16) Den schilt gip mir von hende unt lâz mich den tragen, (454, 1)  
lx x | x x | ~ ~ |  
その盾を私に渡して持たせてください。

(17) die bete lâ belîben, küneginne rîch. (1901, 2)

x l x̣ x l x̣ x l -l̥ x̣ l̥ l̥ x̣ x l x̣ x l x̣ x̣ l̥

そのような望みはお捨てください、富貴な王妃様。

(15) の 2 行目の lâzâ は du に対する命令形 lâz に強調の -â が付いた形である。この -â は動詞の命令形に付くと、切実な願望の気持ちを表わし、それ以外にも名詞や不変化詞に付けられて、強調し生き生きとした描写になる。1 行目 Neinâ の -â もその例である<sup>7</sup>。(16) の lâz はもとの編者 K. Bartsch が A、C 写本に拠り lâ としていたのを、de Boor が B 写本に従い変更したものであるが、B 写本では正確には lâze とあり、その方がこの部分にアクセントがきて、よいのではないだろうか<sup>8</sup>。ただし本稿の考察の対象とした作品では、後に見るように du に対する命令形は語尾のない lâz となっている。『ニーベルンゲンの歌』では前の例の lâzâ 以外に lâzen の du に対する本来の形の命令形はこれ 1 例だけであるので、比較することができない。(17) は縮約形 3 例のひとつであり、(16) の例とは逆に A 写本では lâz である。これらの例でも (10) と同じようにリズムの関係で、動詞の前に目的語が置かれている。また、「捨てる」、「やめる」の意味では本来は本動詞 lâzen あるいは lân でいいのだが、行のリズムを整えるために lâzen, lân を助動詞として (5') では不定詞 sîn をここでは belîben を伴っている。

文法書によれば lâzen の縮約形 lân は直説法、接続法ともすべての人称においてあり得る<sup>9</sup>が、『ニーベルンゲンの歌』では上で見た縮約形の場合以外は、すべて本来の形が用いられている。最後にそれらについて少し検証してみたい。lâzen の人称形は上で見たものの以外に、1 人称単数の直説法に対し lâze が 4 度と母音衝突のため語尾 -e を省略した lâz' が 4 度、3 人称単数の要求話法として lâze 4 例、同じく語尾が省かれた lâz が enlâz 1 例を含めて 6 例、さらに wir が主語で倒置のため語尾 -n が省かれ

7 Vgl. de Boor, Anm. zu 313, 4 u. 1985, 2; BMZ, I, 1f.

8 コンコーダンスにはこの個所は lâ の項に分類されており、Brackert はその形を採用している。

9 Vgl. Paul/Wiehl/Grosse, § 287.

た *lâze* が 2 例あり、これらの形での押韻は皆無である。その中からいくつか見てみよう。

- (18) des ir dâ habt sorge, des *lâz'* ich niht ergên. (479, 2)  
 | x̣ x | x̣ x | - | x̣ ^ | x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |
- (19) got *enlâz'* in nimmer mêre komen in mîniu kûneges lant. (298, 4)  
 x | x | x̣ x | x̣ x | x | - | x̣ ^ |
- (20) nu *lâz* ez got errechen noch sîner vriunde hant. (1046, 2)  
 x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | - | x̣ ^ | x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

これら 3 つの例ではいずれも母音衝突のため語尾 *-e* が省かれて、それで強弱のタクトが守られている。(19) は要求話法の例であるが、否定辞 *en-* が付けられ、前行は 2 音節の *Auftakt* を示している。*nimmer* で否定が表わされるのでこの *en-* は不要に思われるが、Mhd. ではこのように否定の強調として二重否定がよく見られる。(20) の例はもとの Bartsch の版では写本 A に拠る *lâze* の形で、母音衝突にもかかわらず *-e* を残していたのを、de Boor が B 写本に戻し、省略形に改めたものである。

## 2. 『イーヴァイン』における *lâzen*

『イーヴァイン』でも本来の形と縮約形の用法の間に、押韻とリズムに関しては『ニーベルンゲンの歌』と同じような傾向が見られる。すなわち *lâzen* は *gelâzen* 1 例を含めて 13 例ある中で押韻が 3 例のみであるのに対し、*lân* は 49 例すべてで行末にきている。ただし、動詞と助動詞の比率は、*lâzen* が 11 対 2、*lân* が 38 対 11 と、2 作品ではまったく逆である。先ず *lâzen* の用例から見ていこう。*lâzen* 13 例の内訳は、動詞が不定詞 7、過去分詞が前つづり *ge-* の付いた 1 例の他に 2 例、*wir* が主語の人称形が 1 例であり、助動詞が不定詞 1 と過去分詞 1 である。

- (21) des *lâzen* wir iu den strît / vor allen iuwern gesellen, (118f.)  
 その点であなたが仲間の誰よりも優れていると認めます。
- (22) ich hân sî übele *lâzen*. (2025)  
 x | x̣ x | x̣ x̣ ~ ~ | - | x̣ ^ |



私は彼女をひどいやり方で追い払ってしまった。

- (23) der strîf ist lâzen her ze mir: (7690)

この争いの決着は私に任された。

- (24) wan ich hetez baz gelâzen ê. (678)

x x | ẋ x | ẋ x | ẋ x | ẋ ^

なぜならそんなことは始めからやらなかった方が

よかったのです。

(21) は wir が主語のただひとつの例である。(22) と (23) はどちらも本動詞の過去分詞であり、完了と唯一の受動の例であるが、(22) は lâzen で押韻している 3 例のひとつである。『ニーベルンゲンの歌』と同じく、過去分詞はこのようにふつうは ge- が付かないが、(24) は前つづりの付いた形で行のリズムが整えられているただひとつの例である。

次に縮約形 lân について見ると、人称形は 1 例もなく、動詞 38 例中不定詞が 33、過去分詞が 5 (完了 3 と受動 2) であり、助動詞は 11 例すべて不定詞である。次の (25) は (2) のところで触れた、助動詞 lân が不定詞の意味の過去分詞 genozzen をとる用例であるが、ふつうは過去分詞ではなく不定詞をとり、『イーヴァイン』でも他の 5 箇所<sup>10</sup>では geniezen lân の結びつきである。なおこの例の最初の wan は wande ne が融合した wanne がさらに短縮されたもので、warum nicht の意味である。(26) は動詞の受動 2 例のひとつである。

- (25) wan gedâhtet ir doch dar an / waz ich iu gedienet hân?/  
und het sî mîn genozzen lân: (3140-42)

なぜ私があなたにどれほど尽くしたか考えて、そして私が彼女の役に立ったという結果にして下さらなかったのですか。

- (26) dô er ze dem hûse kêrte, / dô wart diu brücke nider lân,

彼が城に向かって行くと、橋が下ろされた。 (4372f.)

その他の形では lâzet 形はなく lât が enlât 2 例を含めて 19 度 (うち押

10 1177. 2016. 4967. 5103. 6382.

韻は3)で、その内訳は動詞が10と助動詞が9とほぼ同数で、これらの点で『ニーベルングンの歌』と異なっている。動詞10の内訳はirに対する命令形が6と直説法が1、3人称単数の直説法が3であり、助動詞はirに対する命令形が5と3人称の直説法が4である。他に3人称複数直説法 *lânt* が *enlânt* 1例を含んで4例(うち押韻は1)、*lâze* が *ich* に対する直説法7例と3人称単数の接続法が3例(うち押韻は1)、さらに3人称単数接続法で *-e* が省かれた *lâz* が1例見られる。これらの中のいくつかを検討してみよう。

- (27) *irn wellet besorgen / dise selben sache, /*  
*man enlât iuch mit gemache / niemer mêre geleben. (7840-43)*

x x l̥x x | x̥ xl̥ - | x̥ ʼ | | x̥ x | - | x̥ xl̥ - ʼ

このようなことに対処しない限り、

あなたは決して平穩に暮らせてもらえないでしょう。

- (28) *vrouwe mîn, die rede lât. (2162)*

ご主人様、そんなことはおっしゃらないで下さい。

- (29) ... / *daz sî bibende vor mir stânt*  
*und durch mich tuont unde lânt. (509f.)*

彼ら [= 獣たち] が震えて私の前で立ちすくみ、

私の言うとおりにしたりやめたりするように、

- (30) *er lâz im nû wesen gâch, / ... (2143)*

l̥x x l̥x x | x̥ x x | x̥ ʼ

彼にはとにかく急いでもらいましょう、

- (31) *nimt sî mir dar über iht,*  
*dazn lâze ich âne clage niht. (5735f.)*

x | x̥ x l̥x xl̥ x̥ xl̥ x̥ ʼ

彼女 [= 姉] がそれ以上に少しでも私から奪うのであれば、

私は訴えもせずにそのままにはしておきません。

(27) は3人称単数直説法の助動詞の例であり、(19)と同じく2音節の Auftakt をもち、*en-* と *niemer* の二重否定で、最初の2行は(13)の2行目と同じく、否定辞 *ne* と接続法による除外文である。また、4行目の最

後の geleben はリズムを整えるために前つづり ge- が添えられている。ge- がなければ、強音が3つ続きリズムが悪くなる。(28)は動詞 lât で押韻した3例のひとつで、命令文にもかかわらず、押韻のために動詞が行末に置かれている。(29)は冒険の旅に出たカーログレナントが、プレツィリヤーンの森で出会った怪人が獰猛な獣たちを自在に操るのを不思議に思って尋ねた問いに、怪人が答えた言葉の一節である。3人称複数4例のうち動詞 lânt が行末にくる唯一の例である。

(30)は母音衝突で語尾 -e が省略された唯一の例であるが、lâze の他の4個所では母音衝突のところでも(31)のように -e が省かれていない。(30)でもB写本では lâze の形であり、その方が lâze の â に強音がきてリズムの上でも滑らかであろう。F. Bech と E. Henrici の版では、B写本に従い lâze 形が採られている。最後に縮約形の命令形の例を挙げておこう。『イーヴァイン』にはこの1例しかないが、ハルトマンの他の4つの叙事作品では enlâ 3例を含めて19度この縮約形の命令形 lâ が用いられているので、これは決してハルトマンに稀な形という訳ではない。

(32) er sprach „nú lâ dir wesen gâch, / ... (958)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

彼は言った。『さあ、急いでくれ、…』

### 3. 『パルツィヴァール』における lâzen

『パルツィヴァール』でも押韻に関しては lâzen と lân の間に前2作品とほぼ同じような傾向が見られるが、lâzen は過去分詞 gelâzen 1例を含めて47例のうち押韻が17と比較的多い。lân は46例中45度行末に置かれている。両者の動詞と助動詞の比率は lâzen が34対13、lân が38対8である。ここでもまず lâzen について検証しよう。lâzen 47例の内訳は動詞が不定詞21、過去分詞12の他に3人称の複数主語に対する接続法現在が1例である。これに対し助動詞は不定詞が12例、wir に対する接続法現在が1例で、過去分詞はない。これらの用例のいくつかを挙げてみよう。

- (33) des lâzen ander liute jehen: (26, 20)  
 x | x̣ x | x̣ x | x̣ x̣ | x̣ x̣ |  
 そんなことは他の人に言わせましょう。
- (34) mîn wiser und mîn tumber, / die tuonz durch ir gesellekeit /  
 und lâzen in mit mir [sîn] leit. (399, 4-6)  
 賢明な人も愚かな人も私に付き合っ  
 私とともに彼のことを気の毒に思っていたきたい。
- (35) mîn vater hât uns beiden / Gelâzen guotes harte vil: (9, 2f.)  
 x | x̣ x | x̣ x | x̣ x̣ | x̣ x̣ | x̣ x̣ | x̣ x̣ |  
 父上は我々二人に財産を非常にたくさん残された。
- (36) nu gebiet nâch iweren mâzen / mîn tuon odr mîn lâzen.  
 私がそうするのかしないのかあなたの (405, 13f.)  
 お考えどおりにお命じ下さい。

例(33)のlâzenは、Bartsch, Martinとも注釈で述べているように、1人称複数に対する勧誘を表わす接続法現在である<sup>11</sup>。これは『ニーベルンゲンの歌』の例(4)と同じように主語wirが省かれた稀な用法である。(34)の例では1行目のmîn wiser und mîn tumberを次行で指示代名詞dieによって受け直しており、lâzenは前行のtuonと同じく、この3人称複数主語dieに対する要求を表わす接続法現在である。これについてもBartsch, Martinとも、このtuonはmögen es thunだと注釈を付けている<sup>12</sup>。(35)は過去分詞に前つづりge-の付いた唯一の例である。このgeはAuftaktに当たり、韻律上とくに必要でもなく、またなぜ頭文字が大

11 Bartschはこれをadhort. conj.でwollen wir lassenの意味だと述べ、Martinはこのlâzenはlassen wirの意でKonj. der Aufforderungだとしている。Vgl. Bartsch, Anm. zu I, 770; Martin, Anm. zu 26, 20.

12 Vgl. Bartsch, Anm. zu VIII, 35 u. 36; Martin, Anm. zu 399, 5 u. 6. Bartschはまた、ここに不定詞sînを補って考えればよいとして、同じくsînのない例として24, 18を指示している。我々のテキストではこの不定詞を補うようにと、かぎっこして示している。不定詞を補えば、lâzenは助動詞となるが、Mhd.では不定詞が省かれるのがふつうのようであり、このようなlâzenを本稿では動詞として分類した。

文字なのかも不明であるが、これはD写本に従ったものである。ところでlâzenには名詞的用法が1例あり、(36)はその例である。このlâzenはtuonとともに不定詞を名詞化したもので、所有代名詞minが付き、動詞gebietの目的語になっている。我々の統計には含めていないが、参考までに挙げておいた。

次に縮約形lânについて見ると、46例中、動詞が不定詞33、過去分詞5（うち受動が2）で、助動詞は前述したように不定詞のみ8例で、過去分詞は皆無である。この縮約形の用例についてもいくつか見てみよう。

- (37) Ir sult die Mœrinne / lân durch mine minne. (94, 11f.)

x | x̣ x | ˊ | ˊ | x̣ | | x̣ x | x̣ | ˊ | x̣ ˊ

私へのミンネのためにあの黒人女を捨ててください。

- (38) wir suln in des geniezen lân: / er hât vil durch uns getân.

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ˊ

(462, 21f.)

我々は彼 [= 神] にはっきりと感謝の気持ちを

示さねばなりません。

神は我々のために多くのことをしてくださったのですから。

(37)はlânが行中に出てくる唯一の例である。このlânは「捨てる」の意味の他動詞で4格の目的語die Mœrinneをとっている。(25)でgeniezenの過去分詞genozzenがlânと用いられる例を挙げたが、そこで述べたように、ふつうは過去分詞ではなく不定詞をとる。(38)はこの作品に現われるgeniezenとlânのそのような3例のひとつである。上の例では意識せざるを得なかったが、このgeniezenは2格の目的語をとり、基本的には「ある人<sup>2</sup>あるいはある事<sup>2</sup>から利益や恩恵を受ける」という意味である。

では次にlâzen, lânのその他の形について見てみよう。まずlâzetとlâtを比べると、lâzetがirに対する動詞の直説法1例と助動詞の命令形3例とごくわずかしは見られないのに比べ、lâtはenlât 2例を含め116度と圧倒的に多い。その内訳は動詞が33と助動詞が83である。さらに詳しく見ると、動詞はirに対する命令形が25、直説法と接続法がそれぞれ1、3人称の直説法が6であり、助動詞はirに対する命令形と直説法が

それぞれ 77 と 4、3 人称の直説法が 2 である。これらについても特徴的な用例をいくつか挙げてみよう。

- (39) *ir lâzet anders mich in schem.* (88, 30)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

さなければあなたは私に恥をかかせることになります。

- (40) *got lère iuch helfe unde rât,*  
*sô daz ir uns bi freuden lât.* (635, 11f.)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

神様があなたに助けと助言をお教えくださり、  
あなたが私たちに喜びを与えてくださるよう。

- (41) *wan lât irn varn an sîn gemach?* (795, 19)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

なぜこの方をお連れして休ませて差し上げないのか。

- (42) *lât ir daz peidiu her ze mir:* (716, 8)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

そなたたち二人ともこの件を私に任せてくれ。

(39) は動詞 *lâzet* の *ir* に対する人称形の唯一の例である。この文は *sonst setzt ihr mich der Beschâhmung aus* の意味である<sup>13</sup>。(40) は *ir* に対する人称形 *lât* 2 例中のひとつであるが、これは要求語法に従属する文中だから接続法であろう。(41) は *ir* が主語の使役の助動詞 *lât* 4 例中のひとつであり、不定詞 *varn* を伴っている。なおこの文の *wan* は例 (25) と同じように *warum nicht* の意味である。(42) は 2 人称複数の *ir* に対する命令文である。ここは主語と同格の *peidiu* (*nhd. beide*) があるので命令文にも主語を添えているのかもしれない。*Mhd.* でも *Nhd.* と同じく命令文に主語が添えられることもある。この作品では *lât* の形は 116 例中動詞 25、助動詞 77 の実に 102 例が *ir* に対する命令形であるが、その中で主語を伴うのはこの 1 例のみである。

ところで『パルツィヴァール』には 3 人称単数主語に対する直説法現

13 Vgl. Martin, Anm. zu 88, 30.

在形として、lât 6 例の他にウムラウトした形 læzet 3 例と læt 10 例が見られる。それらはいずれも行中に現われ、韻律を滑らかにするのに使い分けられている。その用例を 1 例ずつ挙げてみよう。

- (43) swen got den sic dan læzet tragn (537, 23)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^|

- (44) er læt sich gerne schouwen (32, 19)

x | x̣ x | x̣ x | - | x̣ ^|

次に lâzet, lât 以外の形について見よう。先ず lâze とその語尾 -e が省かれた lâz について見ると、lâze が lâzer 1 例を含めて 10 例中 8 例が 1 人称 ich に対する人称形、2 例が 3 人称に対する要求の接続法である。これに対し lâz は主語 ich に対して 11 例と、du に対する命令法が 12 例である。接続法には lâze が、命令形には lâze でなく、lâz が当てられているが、主語 ich に対しては多くの場合両方の形が明確な基準なしに併用されている。du に対する命令形には lâz の他に縮約形 lâ も 12 例見られる。du に対しては他に人称形は lâzest 1 例のみである。また、3 人称複数に対する人称形も直説法 lânt が 1 例のみ行中に見られる。

- (45) got in mit sælde lâze lebn (559, 12)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^|

神が彼を幸せに過ごさせてくださるよう

- (46) wan lâze ich in durch si genesn? (543, 17)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^|

なぜ彼を彼女のために生かしておかないのか。

- (47) Swer nu wîben sprichet baz,

deiswâr daz lâz ich âne haz: (114, 6)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^|

ところで女性のことをもっとうまく賞賛する人がいれば、  
本当に喜んでそれをお任せします。

- (48) nu lâ dirz durch uns bêde leit. (689, 30)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^|

さあ、我々二人のためにそのことを悲しんでくれ。

(45) は 3 人称に対する要求話法 2 例中のひとつであり、この形で強弱のリズムが保たれている。ich が主語の人称形の場合、(46) では *lâze* の語尾を母音衝突にもかかわらず残しているが、(47) ではそれを省いている。この不統一がヴォルフラム自身に由来するのか、写本の筆写生によるものなのかは明らかでないが、ich *lâz[e]* に関しては、我々のテキストでは語尾を残しているのが 8 例、省いているのが 11 例である。(48) は縮約形の命令 12 例のひとつである。この例でも (34) と同じく不定詞 *sin* を補うことが考えられるが、Mhd. ではこのように不定詞なしの表現がふつうである。

#### 4. 『トリスタン』における *lâzen*

『トリスタン』でも *lâzen* は *gelâzen* 4 例を含め、25 例中 5 度と押韻が少なく、*lân* は *gelân* 2 例を含め 34 例すべて行末に置かれている。動詞と助動詞の比率は *lâzen* が 13 対 12、*lân* が 24 対 10 であり、『イーヴァイン』、『バルツイヴァール』と比べると、*lâzen* の助動詞の割合が高い。ここでも先ず *lâzen* の特徴的な用法から見ていこう<sup>14</sup>。

- (49) von diu sô lâzen langez clagen ... / (1861)

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | ˘ ˘ ˘

それゆえに長く嘆くのはやめよう

- (50) durch welhen list und umbe waz  
hâstu daz schif lâzen gân? (6796f.)

どんな企みのために、何のために

お前はあの小船を流したのだ。

- (51) ... / der hin ze gote gelâzen was, (15749)

x | x̣ x | ˘ ˘ x | x̣ x | x̣ ˘

神に対してなされた（偽りの誓い）

14 我々のテキストではウムラウトの長音を合字（Ligatur）で表わしていないが、本稿では他の作品に合わせてふたつの長音に *æ*, *ǣ* の文字を当てた。



動詞 lâzen 13 例の内訳は不定詞が<sup>g</sup>gelâzen 1 例を含めて 8 度、過去分詞 gelâzen が 3 度、wir に対する直説法と接続法がそれぞれ 1 度ずつである。助動詞 lâzen は不定詞が 10 度、過去分詞が 1 度、wir に対する接続法が 1 度である。(49) は (4) の『ニーベルンゲンの歌』の例、(33) の『パルツィヴァール』の例と同じく、この作品でもただ 1 箇所出てくる主語を省いた 1 人称に対する勧誘を表わす接続法現在である。この例の前置詞 von と指示代名詞の具格の結び付き von diu は deshalb の意味で、それをさらに sô で受け直し、リズムを整えている。(50) は助動詞 lâzen の唯一の過去分詞の例、(51) は動詞 lâzen の過去分詞 gelâzen 3 例のひとつである。『トリスタン』では gelâzen の語形は 5 度現われるが、動詞の過去分詞が 3 度（うち受動が 1 度）、リズムの関係で不定詞に前つづりとして付けられたのが 1 度 (6155) および名詞 1 例 (6022) であり、他の作品と違って、動詞の過去分詞は gelâzen として区別されているようである。

lân については、動詞が<sup>l</sup>lân 22 例すべて不定詞、gelân 2 例が不定詞と過去分詞である。助動詞 lân は不定詞が 9 度と過去分詞が 1 度である。(52) はリズムを整えるために前つづり ge- が付けられた不定詞 gelân の唯一の例である。この動詞 gelân はここでは「やめる」、「しない」の意味であり、Bechstein によれば、否定辞の付いた代動詞 entuon<sup>15</sup> と同じ用法で、目的語として sprechen を、あるいは少なくとも ez を補って考えるようにということである<sup>16</sup>。

(52) ern kunde sprechen noch gelân,

x | x̣ x| x̣ x | x̣ x|x̣^|

ern wiste, waz gebærde hân. (11255f.)

彼は話すことも黙っていることもできず、

どういう態度をとればよいのかも分からなかった。

15 Mhd.では同じ動詞を繰り返す代わりに tuon がきわめて多用された。それはまた押韻手段のひとつでもあった。Vgl. Osamu Takeichi: Zum Ersatzverb *tuon*. In: Sprachwissenschaft 17 (1992), Heft 2, S. 200–221.

16 Vgl. Bechstein: Tristan, Anm. zu 11259.

その他の形では、先ず *lâzet* が *enlâzet* 1 例を含め 13 (うち押韻 0) に  
 対し、*lât* が *enlât* 2 例を含め 53 (うち押韻 4) あり、『パルツィヴァール』  
 のように *er* に対するウムラウト形はない。動詞と助動詞の比率は  
*lâzet* が 5 対 8、*lât* が 15 対 38 であり、それぞれの内訳は *lâzet* の動詞が *ir*  
 の命令形 1 と直説法現在 3 および 3 人称単数形が 1 である。助動詞は *ir*  
 に対する命令形 5 と直説法現在 2 および 3 人称単数形が 1 である。*lât* に  
 関しては動詞は *ir* に対する命令形が 6 (うち主語を伴うものが 2) と接  
 続法現在が 1、3 人称単数形が 8 であり、助動詞は *ir* に対する命令形が  
 35 (うち主語を伴うものが 2) と直説法が 1、3 人称単数形が 2 である。  
 それらのうちのいくつかを挙げてみると、

- (53) *nune lâzet er mich, / an dem mîn leben behalten ist.* (18546f.)  
 私の命を保ってくださいているあの方は私を放して下さらない。

- (54) *lât hoeren ir und alle die, / die hie ze gegenwûrte sint / ...*  
*x | x x l x x l x x | x'* (6342f.)  
 あなたもここに列席している皆さまも  
 私に聞かせていただきたい

- (55) *Nune sol iuch niht verdriezen, / ir enlât iu daz entsliezen,*  
 (16923f.)  
 さあ、どうか嫌がらずに (次のことを) 説明させてください。

5 作品の中で『トリスタン』にのみ、2 例だけであるが、3 人称単数主語  
 に対する *lâzet* が見られ、(53) はその中の動詞の例である<sup>17</sup>。(54) は命令  
 形に主語 *ir* が添えられた *lât* 4 例<sup>18</sup>中のひとつで、*lât* は行頭で *Auftakt*  
 に当たり、これでリズムが保たれている。ここは K. Marold、H. F.  
 Massmann さらに R. Bechstein およびそれを踏襲した P. Ganz の版では、  
*ir* の前にコンマが置かれ、この *ir* を次の *alle die* と同じく呼びかけと解さ  
 れている。我々のテキストではこのコンマを取っているので、*ir* は命令  
 文の主語ということになる。しかし、そうすると次の *alle die* は統語的に

17 もう 1 例は *daz si ir weinen lâzet sîn* (13310) の助動詞である。

18 他に助動詞でもう 1 例 (7466) と動詞で 2 例 (6775, 16229) ある。

説明できないので、他の編者のようにコンマを置き *ir* を呼びかけとする方がよいのではないだろうか。(55) の *enlât* は否定の内容の上位文に從属する接続詞のない副文における否定辞 *en-* と接続法で、この *en-* には否定の意味はない、いわゆる無効の否定である<sup>19</sup>。

*lâze* と *lâz* については *lâze* が *enlâze* 1 例を含めて 16 例<sup>20</sup> 中 6 例が *ich* に対する人称形、10 例が 3 人称に対する接続法であり、*lâz* は少なく、*du* に対する命令形が 3 度と *ich* の人称形で語尾が省かれた 1 例のみである。『パルツィヴァール』と同じく命令形は *lâze* でなく、*lâz* である。*du* に対する命令形はこの作品でも *lâz* と並んで縮約形 *lâ* もあり、むしろ *lâ* のがずっと多く 18 例あり、他の作品に比べても多い。*lâze*, *lâz*, *lâ* をそれぞれ 1 例ずつ見てみよう。

- (56) und lâze ez ime gevallen wol, / die wîle ez ime gevallen sol.  
x | x̣ x̣ x̣ ~ ~ x̣ x | x̣ ^ | (15f.)

それが彼に与えられる限り [彼は] 大いに楽しめばよい。

- (57) hier an lâz ich ez wol gestân. (15519)  
x | x̣ x̣ x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

私はそれでよしとしよう

- (58) â hêrre got, durch dîn gebot  
du lâ mir noch sô wol geschehen, (3842f.)  
x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | ~ ~ ^ |

(56) は 3 人称に対する命令の意味の要求話法であるが、このように主語が省かれることはきわめて稀である<sup>21</sup>。Bechstein もこの *lâze* は *lâze er* つまり *möge er lassen* の意味であると注釈を付けている<sup>22</sup>。『トリスタン』にはこのような *lâzen* は 2 例見られる<sup>23</sup>。ところで、この例の 1 行目

19 Vgl. Paul/Wiehl/Grosse, § 441 (= Paul/Schröbler, § 334, 3).

20 *lâze* には他に名詞が 1 例 (16018) ある。

21 Vgl. Paul/Wiehl/Grosse, § 399 (= Paul/Schröbler, § 270).

22 Vgl. Bechstein: Tristan, Anm. zu 15. この版を改訂した Ganz もこの *lâze* は *er lâze* だとしている。Vgl. P. Ganz: Tristan, Anm. dazu.

23 もう 1 例は 18009.

lāze ez や 2 行目 wile ez から分かるように、この作品では母音衝突の場合でも弱音の母音が省かれていないが、(57) はリズムのために lāze の語尾が省かれた例である。ここではさらにそのために不定詞 stān にも前つづり ge- が付けられている。(58) は du に対する縮約形の命令形 lā 18 例の中で主語を伴った唯一の例である。この du は韻律上はとくに必要ではないが、命令を強調しているのであろう。du に対しては他に人称形 lāzest が 1 例 (7500) と、他の作品には見られないその縮約形 lāst が 1 例、さらにそのウムラウト形 læst が 1 例 (9384) あり、また 3 人称複数形 lānt も 1 例 (14220) 見られる。lāst の例を挙げておこう。ここは前の行の gāst と押韻するためにこの形が用いられたのであろう。du に対するこの縮約形は『イーヴァイン』以外のハルトマンの 3 作品に 12 例あり、そのうち 8 例で押韻している。

- (59) sich, daz du dinen mæren / und dīner rede sô mite gāst, /  
 daz dû s'ih̄t under wegen lāst: (9946-48)  
 そなたの主張するその話をそのまま守りとおし  
 それを途中で放棄などしないよう気を付けなさい。

## 5. 『イタリアの客人』における lāzen

ここでも lāzen と lān からまず見ていこう。lāzen 39 例 (うち押韻が 4) と gelān 1 例を含む lān 54 例 (うち押韻が 42) の動詞と助動詞の比率は、それぞれ 30 対 9 および 27 対 27 である。『ニーベルンゲンの歌』以外の 3 作品と比べて助動詞 lān の比率が高い。動詞 lāzen 30 例の内訳は不定詞が 23、過去分詞が 1、wir が主語の直説法現在が 3、3 人称複数に対する接続法が 3 である。助動詞 lāzen は 9 例すべて不定詞である。lān は動詞の過去分詞 gelān と lān それぞれ 1 例を除き、その他の動詞とすべての助動詞は不定詞である。これらについていくつかの用例を見てみよう。

- (60) Nu wil ich rātn den herren allen  
 daz siz lieht nien lāzen vallen, (8241f.)  
 私はすべての殿様方に、決して明かりを

捨てないようにお願いしたい。

- (61) swer nâch gewin lât sinen muot,  
der muoz dâ mit lâzen grœzer guot, (8859f.)  
利得を求めて自分の心を捨てる者は  
それによってもっと大きな財を捨てることになる。
- (62) dâ von hân ich ze jungest lân  
x | x̣ x̣ x̣ x̣ x̣ x̣ x̣  
daz ich von ir ze sprechen hân. (13933f.)  
だから私はそれについて話すべきことを  
最後に残しておいたのです。
- (63) dâ von hân ich ze rukke gelân  
x | x̣ x̣ x̣ x̣ x̣ x̣ x̣  
swaz ich solt anders hân getân, (12291f.)  
だから私はそうでなければ当然すべきであったことを  
放っておいたのです。

(60) の lâzen は 3 人称複数の接続法 3 例のひとつである<sup>24</sup>。ここは要求を表わす文に従属する副文の中なので接続法となっている。(61) には 3 人称単数直説法 lât と不定詞 lâzen の 2 例出てくるが、どちらも「捨てる」の意味の他動詞である。同じ意味であるが、(60) では押韻のために lâzen を助動詞として、不定詞 vallen を伴っている。(5') では sîn、(17) では beliben を用いている例を見たが、このように押韻し、リズムを整えるために Mhd. ではさまざまな表現の可能性が利用される。(62) の lân と (63) の gelân はともに動詞の過去分詞である。縮約形 lân の過去分詞はこの作品ではこの 2 例のみであり、一方には前つづり ge- が付いている。ge- があると、上に示したように分割強音 (gespaltene Hebung) になり、韻律上問題はないが、この ge- はリズムの上では特に必要がなく、なければ (62) の 1 行目と同じように強弱交代のスムーズな流れである。異本一覧によれば、これは写本 AD によっている。

その他の形では lâzet 形がなく、lât は enlât 4 例を含んで動詞 43 と助動

24 他に 65 と 9265.

詞 18 の 61 例（うち 50 で押韻）であり、他の 4 作品と比べ、動詞の割合が目立って高い。その内訳は動詞 43 が *ir* に対する命令形 6 と 3 人称単数が 37、助動詞 18 が *ir* に対する命令形 3 と 3 人称単数が 15 であり、動詞、助動詞とも 3 人称単数形がはるかに多い。さらに『イタリアの客人』にはこの 3 人称単数の形にウムラウト形が多く用いられ、*læzet* が *er* に対する動詞 2 例（うち押韻は 0）、*læt* が *enlæt* 2 例を含む 30 例（うち押韻は 1）のうち動詞が 19 と助動詞が 11 とこれも動詞が多い。その他の人称形については、*lâze* が *enlâze* 1 例を含めて *ich* に対して 6 例、3 人称単数接続法 7 例、倒置のため主語 *wir* で語尾が省かれたもの 2 例の 15 例、語尾の欠けた *lâz* は *ich* 1 例、3 人称単数接続法 5 例の他に *du* に対する命令形が 1 例である。命令形は縮約形 *lâ* の方が多く 8 例見られる。さらに *du* に対する *lâzest* 1 例と、3 人称複数 *lâzent* が動詞 1 と助動詞 2 の 3 例ある。次の例は助動詞 *lât* と *læt* が行末と文中に用いられたものと動詞 *lâzent* の 1 例である。

- (64) ... / *daz got sô müelich leben lât / den derz niht verworht hât /*  
*und læt den leben vroelichen / derz dâ verwürket tegelichen.*  
 (4871-74)

神がそれ [= 神の恵み] を台無しにしなかった人につらい生活をさせ、日々それを台無しにするような者に喜ばしい生活をさせるといふこと（を奇妙なことだと思う）

- (65) *êren die vrumen baz / dan die boesen: wizzt vür wâr, /*  
*si lâzent ir bôsheit gar.* (6366-68)  
 立派な人たちを卑しい者たちよりももっと敬うことである。  
 しかと心得ていただきたい。そうすれば卑しい者たちはその  
 卑しい心をすっかり捨てるでしょう。

これまで見てきた *lâzen*, *lân* のさまざまな語形の用例数と押韻数を一覧表にして以下に示そう。

表 1 : lâzen と lân の語形の用例数 (カッコ内は押韻数で内数)

	Nib.	Iwein	Parz.	Trist.	W. Gast
lâzen	56 (0)	12 (3)	46 (17)	21 (4)	39 (4)
gelâzen	2 (0)	1 (0)	1 (0)	4 (1)	0
lân	72 (68)	49 (49)	46 (45)	32 (32)	53 (41)
gelân	0	0	0	2 (2)	1 (1)
lâzet	21 (0)	0	4 (0)	13 (0)	0
læzet	0	0	3 (0)	0	2 (0)
lât	80 (1)	19 (3)	116 (14)	53 (4)	61 (50)
læt	0	0	10 (0)	0	30 (1)
lâz	10 (0)	1 (0)	11 (0)	1 (0)	6 (0)
lâze	10 (0)	10 (1)	10 (0)	16 (1)	15 (2)
lâzest	1 (0)	0	1 (0)	1 (0)	1 (0)
læst	1 (0)	0	0	0	0
lâzent	1 (0)	0	0	0	3 (0)
lânt	1 (1)	4 (1)	1 (0)	1 (0)	0
lâzâ (Imp.)	1 (0)	0	0	0	0
lâz (Imp.)	1 (0)	0	12 (0)	3 (0)	1 (0)
lâ (Imp.)	3 (0)	1 (0)	12 (0)	18 (0)	8 (0)

## 6. おわりに

以上 lâzen とその縮約形 lân のさまざまな形について 5 つの作品における用法を見てきたのであるが、それらの比較から次のことが分かる。『ニーベルンゲンの歌』では使役の助動詞の用法がはるかに多いのに対して、他の 4 作品では lât に一部例外はあるものの、本来の本動詞としての方がまだ多く用いられている。lâzen, lân の語形は当然不定詞が多いが、『パルツィヴァール』では lâzen の過去分詞が比較的多く、『トリスタン』では用例数は少ないものの、人称形でもさまざまに用いられている。助動詞 lân は 87 例中『トリスタン』の 1 例を除き、すべて不定詞である。lâzet 形は『ニーベルンゲンの歌』と『トリスタン』には比較的多いものの、縮約形 lât に比べると非常に少なく、『イーヴァイン』と『イタリアの客人』には皆無である。lât 形は助動詞の ir に対する命令形が多く、とくに『ニーベルンゲンの歌』では 80 例すべてがそうである。ただ、『パルツィヴァール』では ir に対する動詞の命令形も比較的多い。4 つの叙事作品

に比べ『イタリアの客人』は異なった傾向を示し、動詞、助動詞とも 3 人称単数直説法がずっと多い。

Nhd.の lassen は標準語では du, er に対する直説法現在形は必ずウムラウトする。しかし Mhd.の本稿の考察の対象にした作品ではこのウムラウト形は非常に少なく、『ニーベルンゲンの歌』で du に対する læst がわずか 1 例のみ、『パルツィヴァール』でも er に対する læzet 3 例とその縮約形 læt 10 例で『イーヴァイン』と『トリスタン』には 1 例も見られない。この点でも『イタリアの客人』は異なっており、læzet 2 例と læt 30 例と比較的多いが、それでも lât の方がずっと多く 61 例ある。

過去分詞について見ると、5 つの作品で取り上げた順にそれぞれ 6、9、17、6、3 の合計 41 例あり、そのうち助動詞は lâzen が 3 例と lân が 1 例と非常に少ない。また前つづり ge- が付く形は『ニーベルンゲンの歌』以外の 4 作品に gelâzen 5 例と gelân 2 例見られ、いずれも動詞である。リズムの関係があるので一概には言えないが、我々が考察した 5 作品では ge- 形は動詞に限られているようである。最後にそれぞれの特徴が一覧できるように、lâzen, lân, lâzet, lât の 4 つの語形について動詞と助動詞の用例比と、さらにそれらを語形別に分類したもののおよび過去分詞について 3 つの表にして示し、この小論を閉じることにしたい。

表 2：動詞と助動詞の用例比

	Nib.	Iwein	Parz.	Trist.	W. Gast
[ge-] lâzen	18:40	11:2	34:13	13:12	30:9
[ge-] lân	30:42	38:11	38:8	24:10	27:27
lâzet	0:21	0	1:3	5:8	0
lât	3:77	10:9	33:83	15:38	43:18

表 3：語形別分類

	Nib.	Iw.	Parz.	Trist.	W. Gast
[ge-] lâzen Verb Inf.	15	7	21	8	23
Part. Prät.	2	3	12	3	1
1. Pl. Ind.	0	1	0	1	3
1. Pl. Konj.	0	0	0	1	0
3. Pl. Konj.	1	0	1	0	3



lāzen の用法について

Hilfsv. Inf.	33	1	12	10	9
Part. Prät.	1	1	0	1	0
1. Pl. Konj.	4	0	1	1	0
3. Pl. Konj.	2	0	0	0	0
[ge-] lān Verb Inf.	26	33	33	23	25
Part. Prät.	3	5	5	1	2
3. Pl. Konj.	1	0	0	0	0
Hilfsv. Inf.	42	11	8	9	27
Part. Prät.	0	0	0	1	0
lāzet Verb Imp. zu <i>ir</i>	0	0	0	1	0
Ind. zu <i>ir</i>	0	0	1	3	0
3. Sg. Ind.	0	0	0	1	0
Hilfsv. Imp. zu <i>ir</i>	16	0	3	5	0
Ind. zu <i>ir</i>	3	0	0	2	0
Konj. zu <i>ir</i>	2	0	0	0	0
3. Sg. Ind.	0	0	0	1	0
lāt Verb Imp. zu <i>ir</i>	0	6	25	6	6
Ind. zu <i>ir</i>	0	1	1	0	0
Konj. zu <i>ir</i>	0	0	1	1	0
3. Sg. Ind.	0	3	6	8	37
Hilfsv. Imp. zu <i>ir</i>	77	5	77	35	3
Ind. zu <i>ir</i>	0	0	4	1	0
3. Sg. Ind.	3	4	2	2	15

表 4：過去分詞

	Nib.	Iwein	Parz.	Trist.	W. Gast
lāzen Verb	2	2	11	0	1
Hilfsv.	1	1	0	1	0
gelāzen Verb	0	1	1	3	0
lān Verb	3	5	5	0	1
Hilfsv.	0	0	0	1	0
gelān Verb	0	0	0	1	1

テキスト

- Das Nibelungenlied*. Nach dem Text von K. Bartsch und H. de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von S. Grosse. Stuttgart 1997.
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Herausgegeben von G. F. Benecke und Karl Lachmann, neubearbeitet von Ludwig Wolff, 7. Ausgabe, Bd. 1: Text. Berlin 1968.
- Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann, Übersetzung von P. Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schirock. Berlin/New York 1998.
- Gottfried von Strassburg: *Tristan*. Nach dem Text von Friedrich Ranke, neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 2. durchgesehene Auflage, 3 Bände (Reclam Nr. 4471, 4472, 4473). Stuttgart 1981.
- Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*. Hrsg. von Heinrich Rückert, mit einer Einleitung und Register von Friedrich Neumann. Berlin 1965.

主要参考文献

- Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, herausgegeben von H. de Boor; 20. Auflage, Wiesbaden 1972.
- Das Nibelungenlied*. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Hrsg., übersetzt und mit einem Anhang versehen von Helmut Brackert, Fischer (Taschenbuch Nr. 6038, 6039). Frankfurt a.M. 1987.
- F. M. Bäuml/E.-M. Fallone: *A Concordance to the NIBELUNGENLIED (Bartsch-De Boor Text)*. Leeds 1976.
- Das Nibelungenlied. Paralleldruck der Handschriften A, B und C nebst Lesarten der übrigen Handschriften*. Hrsg. von Michael Batts. Tübingen 1971.
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Text der 7. Ausgabe von G. F. Benecke, K. Lachmann u. L. Wolff, Übersetzung u. Anmerkungen von Th. Cramer. Berlin 1974.
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von M. Wehrli. Zürich 1988.
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Der Ritter mit dem Löwen. Hrsg. von E. Henrici, 2 Teile. Halle 1891 u. 1893.
- R. A. Boggs: *Hartmann von Aue Lemmatisierte Konkordanz zum Gesamtwerk*. Nendeln 1979 (Indices zur deutschen Literatur 12/13).
- Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titarel*. Hrsg. von Karl Bartsch. Leipzig 1875 (Deutsche Classiker des Mittelalters 9).

- Wolframs von Eschenbach Parzival und Titurel*. Hrsg. von Ernst Martin, Zweiter Teil: Kommentar. Halle 1903.
- C. D. Hall: *A complete Concordance to Wolfram von Eschenbach's Parzival*. New York & London 1990.
- Gottfried von Strassburg: *Tristan*. Hrsg. von R. Bechstein, 2 Bde. 5. Auflage. Leipzig 1930 (Deutsche Klassiker des Mittelalters 7).
- Gottfried von Straßburg: *Tristan*. Nach der Ausgabe von R. Bechstein. hrsg. von Peter Ganz. 2 Bde. Wiesbaden 1978 (Deutsche Klassiker des Mittelalters, neue Folge 4).
- C. D. Hall: *A complete Concordance to Gottfried von Strassburg's Tristan*. Lewiston/Queenston/Lampeter 1993.
- Kurahei Ogino u. Minoru Shigeto: Wortindex zu „Der Wälsche Gast“ des Thomasin von Zirclaria, erstellt am 19.8.1991 [im Manuskript].
- G. F. Benecke, W. Müller, F. Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch I-III*, Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66. Hildesheim 1963 [=BMZ].
- Dieter Breuer: *Deutsche Metrik und Versgeschichte*. 3. Aufl. 1994 München (UTB 745).
- Otto Paul/Ingeborg Glier: *Deutsche Metrik*. 7. Auflage, München 1968.
- Jacob Grimm: *Deutsche Grammatik*. Bd. IV. Hrsg. von Gustav Roethe und Eduard Schröder, Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Gütersloh 1898, Hildesheim 1967.
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 20. Auflage von Hugo Moser und Ingeborg Schröbler. Tübingen 1969.
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 23. Auflage, neu bearbeitet von Peter Wiehl und Siegfried Grosse. Tübingen 1989.

# Zum Gebrauch vom mhd. *lâzen*

— unter besonderer Berücksichtigung der Endreimdichtung —

Osamu TAKEICHI

## 0. Vorwort

Das mittelhochdeutsche *lâzen* ist eigentlich ein reduplizierendes Verb, welches mit einer Person, einer Sache, einem reflexiven Pronomen usw. in den Bedeutungen „loslassen, entlassen, aufgeben, unterlassen, zurücklassen usw.“ verwendet wird. Es dient daneben auch mit einem Infinitiv schon als kausatives Auxiliärverb wie das neuhochdeutsche „lassen“. In den beiden Verwendungen werden die kontrahierten Formen wie *lân*, *lât* usw. neben den eigentlichen Lentoformen zum Reimen und zum Rhythmisieren häufig benutzt. In dieser Arbeit werden verschiedene Belege aus dem Nibelungenlied, Hartmanns Iwein, Wolframs Parzival, Gottfrieds Tristan und dem Wälschen Gast Thomasins von Zirclaria verglichen und die Charakteristika dieses Verbs im Rahmen der mhd. Endreimdichtung erklärt. Ich beschränke mich hier auf die Formen *lâzen*, *lân*, *lâzet* und *lât*. Die folgende Tabelle zeigt das Verhältnis des Vollverbs zum kausativen Auxiliärverb der vier Formen in den fünf Werken:

Tabelle 1: Belege der vier Formen im Vollverb- und Auxiliärverbverhältnis

	Nib.	Iwein	Parz.	Trist.	W. Gast
[ge-] <i>lâzen</i>	18:40	11:2	34:13	13:12	30:9
[ge-] <i>lân</i>	30:42	38:11	38:8	24:10	27:27
<i>lâzet</i>	0:21	0	1:3	5:8	0
<i>lât</i>	3:77	10:9	33:83	15:38	43:18

Aus dieser Tabelle ergibt sich, dass das Verhältnis der vier Formen als Vollverb und Hilfsverb ganz unterschiedlich ist. Das Nibelungenlied und der Wälsche Gast zeigen zwei entgegengesetzte Pole: Im ersteren sind

mehr Hilfsverben belegt, während sich im letzteren mehr Vollverben finden. Die anderen drei Werke stehen in dieser Hinsicht zwischen den beiden Polen. Die Form *lâzet* begegnet nur im Nibelungenlied häufig, und zwar in allen Belegen als Hilfsverb. Ihre kontrahierte Form *lât* zeigt außer im Iwein Häufigkeit und deren auxiliare Verwendung viel mehr im Nibelungenlied und im Parzival.

## 1. *lâzen* im Nibelungenlied

In diesem Werk tritt die Vollform *lâzen*, inklusive zwei mit einem *ge-* präfigierten Belegen, insgesamt 58mal im Versinneren auf, wovon es 18mal als Vollverb und 40mal als Hilfsverb gebraucht wird. Seine kontrahierte Form *lân* dient hingegen, einschließlich einem mit einer Verneinungspartikel *en-* versehenen *enlân*, dient 68mal von 72 Belegen zum Reimen, wovon es 30mal als Verb und 42mal als Hilfsverb verwendet wird. Auf den Reim bezüglich sind diese zwei Formen ganz unterschiedlich.

Die 18 Belege von *lâzen* als Verb sind 15mal Infinitiv, zweimal Part. Prät. und einmal die 3. Pers. Pl. Konj. Präs. Die 40 Belege als Hilfsverb bestehen aus 33maligem Inf., einem Part., viermaligem Konj. Präs. für *wir* und zweimaliger 3. Pers. Pl. Konj. Präs. Die 30 Belege von *lân* als Vollverb sind 26mal Inf., dreimal Part. und einmal die 3. Pers. Pl. Konj., während es in all den 42 Belegen als Hilfsverb infinitivisch ist.

Die Form *lâzet* steht in all den 21 Belegen für *ir*, und zwar im Versinneren. Diese 21 Belege bestehen aus 16maligem Imperativ, zwei Beispiele mit dem Subjekt *ir* einbegriffen, dreimaligem Ind. Präs. und zweimaligem Konj. Präs. Die zusammengezogene Form *lât* steht 77mal für den Imperativ zu *ir*, inklusive zwei vom Subjekt begleiteten Belegen, und dreimal für die 3. Pers. Sg. Präs. Diese 80 Belege zeigen alle *lât* als kausatives Hilfsverb, und nur in einem davon kommt *lât* ans Versende.

## 2. *lâzen* im Iwein

Im Iwein finden wir 13mal *lâzen* (davon dreimal im Reim) und 49mal

*lân* (alles im Reim). Das Verhältnis von Verb und Hilfsverb ist im Gegensatz zum Nibelungenlied 11 zu 2 bei *lâzen* und 38 zu 11 bei *lân*. Die 11 Belege von *lâzen* als Verb bestehen aus 7maligem Inf., dreimaligem Part. und einmaliger 1. Pers. Pl. Ind. Präs., während *lâzen* als Hilfsverb je einmal für Inf. und Part. erscheint. *lân* steht beim Verb 33mal als Inf. und 5mal als Part. und beim Hilfsverb alle 11mal als Inf.

Im Iwein ist die Form *lâzet* nicht belegt. *lât* begegnet 10mal als Verb (davon 6mal Imp. für *ir*, einmal Personalform für *ir* und dreimal die 3. Pers. Sg. Ind. Präs.) und 9mal als Hilfsverb (davon 5mal Imp. für *ir* und 4mal die 3. Pers. Sg. Ind. Präs.).

### 3. *lâzen* im Parzival

In diesem Werk finden sich *lâzen* 47mal (davon 17mal am Versende) und *lân* 46mal (davon 45mal im Reim). *lâzen* als Verb kommt außer 21mal im Inf. und 12mal im Part. einmal in der 3. Pers. Pl. Konj. vor. Das auxiliare *lâzen* ist 12mal infinitivisch und einmal die 1. Pers. Pl. Konj. Es ist als Partizip nie belegt. Wendet man sich *lâzet* und *lât* zu, tritt die volle Form nur viermal zu *ir* auf, die gekürzte Form kommt hingegen, zwei *enlât* einbegriffen, unverhältnismäßig häufig, 116mal, vor. Unter den 33 Verben zählt man auf 25 Imperativ- und zwei Personalformen zu *ir*, und 6 Personalformen der 3. Pers. Sg. Ind. Von den 83 Hilfsverben von *lât* stellt es die Imperativ- und Personalform zu *ir* je 77- und 4mal und zweimal die 3. Pers. Sg. dar. Der Parzival zeigt außerdem als umgelautete Formen für die 3. Pers. Sg. dreimal *læzet* und 12mal *læt* im Versinnern.

### 4. *lâzen* im Tristan

Hier ergibt sich die gleiche Tendenz wie im Parzival: Mit dem 21maligen *lâzen* und 4maligen *gelâzen* wird nur 5mal gereimt, während *lân* mit zwei *gelân* alle 34mal am Versende steht. *lâzen* als Auxiliarverb zeigt hier einen höheren Prozentsatz als in den anderen zwei höfischen Epen. Was die Verteilung des verbalen *lâzen* betrifft, ist es 8mal Inf., einschließlich eines *gelâzen*, dreimal das Part. *gelâzen* und je einmal Ind.

und Konj. zu *wir*. Das auxiliare *lâzen* zeigt 10mal Inf. und je einmal Part. und die 1. Pers. Pl. Konj. *lân* als Verb ist alle 22mal Inf. *gelân* ist je einmal Inf. und Part., während das auxiliare *lân* 9mal Inf. und einmal Part. ist.

Das Verhältnis von *lâzet* als Verb und Hilfsverb steht im Imperativ eins zu fünf, als Ind. Präs. zu *ir* drei zu zwei und in der 3. Pers. Sg. eins zu eins. Das verbale *lât* besteht aus 6maligem Imperativ, einschließlich zwei Belegen mit dem Subjekt, und einem Konj. Präs. zu *ir* und 8maliger 3. Pers. Sg. Ind. *lât* als Hilfsverb zeigt 35mal Imperativ, gleichfalls wie beim Verb inklusive zwei Belegen mit dem Subjekt, und eine Personalform zu *ir*, und zwei 3. Pers. Sg. Ind.

## 5. *lâzen* im Wälschen Gast

Diese Spruchdichtung zeigt teilweise ein anderes Verhältnis zwischen Verben und Hilfsverben als die anderen epischen Werke: Bei *lân* ist das Verhältnis von Verben zu Hilfsverben gleich. Außer *lân* werden die anderen Formen, vor allem *lât*, als Verb viel mehr gebraucht. Die Belege des verbalen *lâzen* bestehen aus 23maligem Infinitiv, je dreimaliger 1. Pers. Pl. Ind. und 3. Pers. Pl. Konj. und einem Part., während das auxiliare *lâzen* alle 9mal Inf. ist. *lân* ist als Verb außer je einem Part. *gelân* und *lân* 25mal und als Hilfsverb alle 27mal Inf. Was die Personalformen betrifft, fehlt hier die Form *lâzet* wie im Iwein. *lât* als Verb stellt 6mal die Imperativform zu *ir* und 37mal die Personalform zur 3. Pers. Sg. Ind. dar, und als Hilfsverb steht es zwischen den gleichen beiden Formen im Verhältnis von 3 zu 15. Sowohl als Verb wie auch als Auxiliarverb erscheint *lât* weit häufiger in der 3. Pers. Sg. In der 3. Pers. Sg. Ind. erscheinen auch die umgelauteten Formen *læzet* zweimal als Verb und *læt* 30mal (davon 19mal als Verb und 11mal als Hilfsverb und nur einmal im Reim), inklusive zwei *enlæt*.

## 6. *lâzen* als Partizip Präteritum

Zuletzt betrachten wir die Formen von *lâzen* als Partizip Präteritum. Was das Partizip Präteritum betrifft, so finden sich in den fünf Werken

insgesamt 41 Belege, wovon als Hilfsverb nur *lâzen* dreimal und *lân* einmal. Als mit der Vorsilbe *ge-* präfigierte Form begegnen außer im Nibelungenlied *gelâzen* fünfmal und *gelân* zweimal, und zwar sind sie alle das Partizip des Verbs. Weil die Form mit *ge-* wegen des Reimbezugs auch im Infinitiv erscheint, kann man dies zwar nicht einfach behaupten, und in Wirklichkeit erscheinen als Infinitiv *gelâzen* zweimal im Nibelungenlied und *gelâzen* und *gelân* je einmal im Tristan. Aber für das Hilfsverb *lâzen* und *lân* ist kein Beispiel mit der Vorsilbe belegt. Die folgende Tabelle gibt alle Belege als Part. Prät. in den fünf Werken an.

Tabelle 2: Belege der Partizipien Präteritum

	Nib.	Iwein	Parz.	Trist.	W. Gast
<i>lâzen</i> (Verb)	2	2	11	0	1
(Hilfsv.)	1	1	0	1	0
<i>gelâzen</i> (Verb)	0	1	1	3	0
<i>lân</i> (Verb)	3	5	5	0	1
(Hilfsv.)	0	0	0	1	0
<i>gelân</i> (Verb)	0	0	0	1	1

Was die umgelauteten Formen betrifft, so zeigt das nhd. *lassen* in der 2. und 3. Pers. Sg. Ind. Präs. *läßt*. Aber in den mhd. Gegenstandswerken unserer Forschung kommen umgelautete Formen selten vor: im Nibelungenlied nur einmal *læst* für *du*, im Parzival dreimal *læzet* und 10mal *læt*. Der Wälsche Gast zeigt auch in diesem Punkt eine andere Proportion. Hier treten in der 3. Pers. Sg. zweimal *læzet* und 30mal *læt* auf, wenn sich auch für die unumgelautete Form *lât* noch mehr Belege, 61mal, finden.

Im japanischen Text habe ich verschiedene Belege angeführt und analysiert, aber in der Zusammenfassung kann ich leider wegen des mangelnden Raums keine Belege angeben. Hier sei nur darauf hingewiesen, zur Information die weiteren zwei Tabellen Nr. 1 (S.71) und Nr. 3 (S.72f.) über die Zahlen der Belege von *lâzen* und *lân* (die Zahlen in Klammern geben die zum Reimbezug benutzten Belege an) und über die der Belege von *lâzen* nach den Wortklassen zu sehen.